❶ 黒門（くろもん）

明治33年（1900年）に完成した尾張徳川家の邸宅の遺構で、総けやき造りの三間薬医門です。連続する脇長屋と塀を含めて、昭和20年（1945年）の大空襲による焼失の被害を免れた数少ない遺産であり、武家屋敷の面影を伝える貴重な建造物群です。

❷ 龍門の瀧（りゅうもんのたき）

「戸山御庭之図」から龍門の瀧（江戸時代後期 徳川美術館蔵）

龍門瀑ともいわれ、鯉が滝を登りきって竜となったという登竜門伝説に基づく滝の一形式です。尾張家江戸下屋敷跡地にあった滝の石を使用し、今回、徳川園に再現しました。

寛文9年（1669年）第二代藩主光友の頃に造営が始まった尾張家江戸下屋敷（戸山屋敷）では、当代随一と言われた庭園を有し、園内には「鳴鳳渓」と呼ばれた渓谷を構成する龍門の瀧がありました。鳴鳳渓は、渓流の飛石の上を渡りきると急に龍門の瀧から落ちる水が増して石が水中に没するという趣向が凝らされたもので、当時園遊会に招かれた将軍や諸大名は、大変驚き、また、喜び楽しんだと言われています。

戸山屋敷は現在の東京都新宿区の戸山町辺りで、今では面影を残す場所も数少なくなりましたが、平成10年（1998年）に早稲田大学の敷地内で江戸時代の大規模な石組みが見つかりました。早稲田大学と新宿区教育委員会による発掘調査の結果、戸山屋敷にあった龍門の瀧の遺構であることが確認されました。発掘された石材は、伊豆石と呼ばれる安山岩で、総数約360個、総重量約250tに上り、江戸城築城の余り石と推定されています。徳川園では、早稲田大学から譲り受けたこれらの石材を滝の布落ちや護岸、河床、飛石などに用いるとともに、水量を急激に増す仕掛けを取り入れて、戸山屋敷の龍門の瀧を蘇らせました。

発掘の様子

（写真／新宿区教育委員会 所蔵）

沿革

名古屋城本丸の東約3kmの地にある徳川園は、徳川御三家筆頭である尾張藩第二代藩主光友が、元禄8年（1695年）に自らの隠居所として大曽根屋敷を造営したことを起源としています。当時の敷地は約13万坪（約44ha）の広さで、庭園内の泉水には16挺立の舟を浮かべたと言われています。光友の没後、この地は尾張藩家老職の成瀬、石河、渡邊三家に譲られましたが、明治22年（1889年）からは尾張徳川家の邸宅となりました。昭和6年（1931年）名古屋市は、第十九代当主義親から邸宅と庭園の寄付を受けた後、改修整備を行い、翌年「徳川園」として一般公開しましたが、第二次世界大戦の大空襲によってほとんどの建物や樹林などが焼失してしまいました。

戦後、現代的な都市公園として改修し、市民に利用されてきた徳川園は、平成13年（2001年）から日本庭園として再整備を行い、平成16年（2004年）に開園しました。

徳川園は、矢田川の河岸段丘を生かした高低差のある地形、既存の照葉樹の森、立体的に迫る大きな岩組みが特徴で、変化に富んだ景観を劇的に展開する構成としています。

徳川園名所名称

「龍仙湖」「観仙楼」「大曽根の瀧」「虎の尾」「虎仙橋」「瑞龍亭」「四睡庵」

「徳川園の地は尾張徳川家第二代光友が隠居所として営んだ地であった。光友の諡號は瑞龍院と言う。尾張徳川家の大曽根別邸とその地を名古屋市に寄付した第十九代義親はマレーで虎狩りを行ったのが因となって『虎狩りの殿様』『虎狩りの侯爵』と呼ばれ有名となった。龍と虎とは古代中国より霊獣として我が国に伝えられたことは言うまでもなく、かつ徳川園に所縁深い光友・義親の二人の縁に結んで名付ける。」

尾張徳川家第二十一代当主　徳川義宣氏より

ご案内

■入園料／一般：300円　（中学生以下無料）

（共通観覧や、団体などの各種割引が有ります。）

■開園時間／午前9時30分～午後5時30分

（入園は午後5時まで）

■休園日／月曜日（休日にあたる場合は、直後の平日）**12月29日～1月1日**

■注意事項／

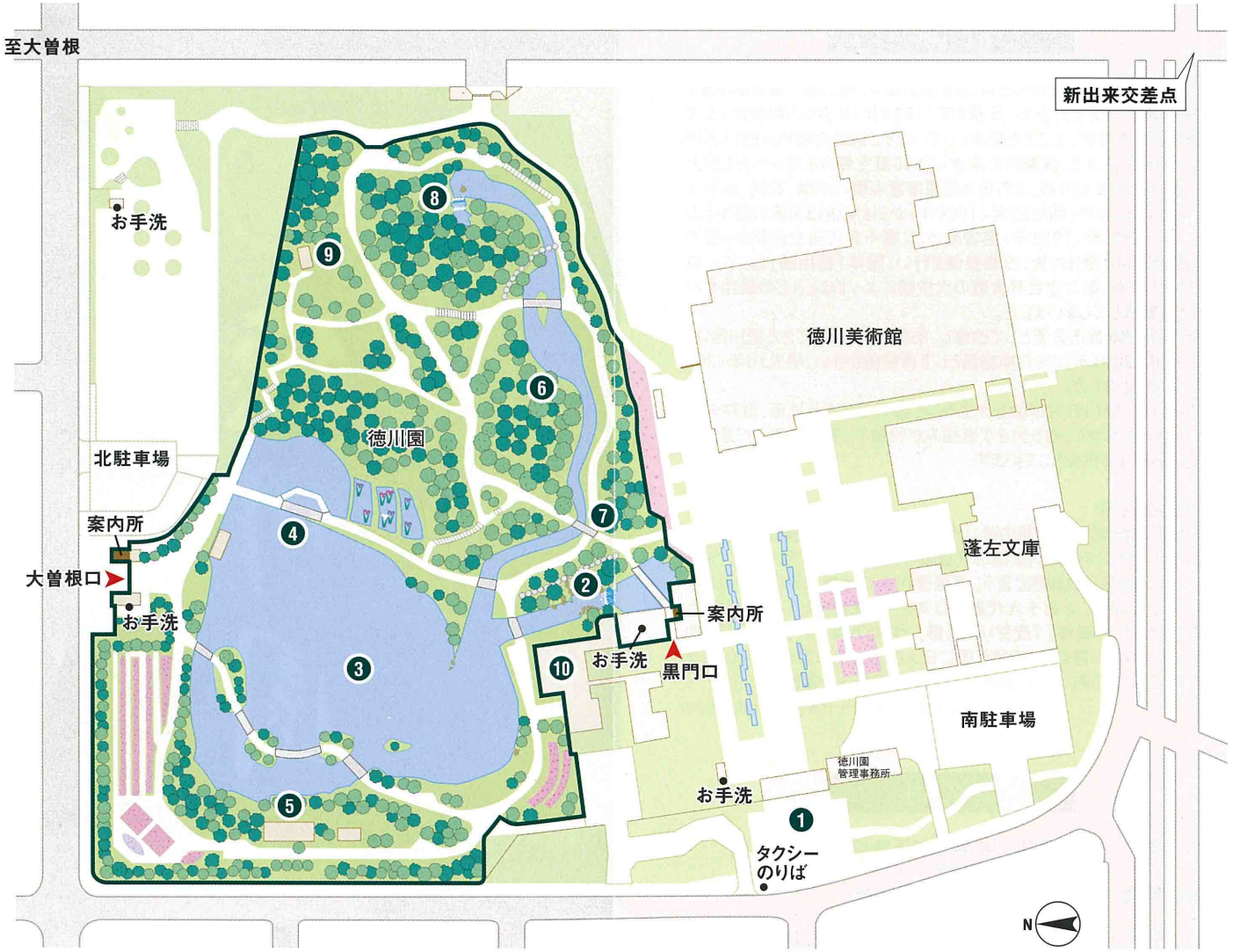
- 園内での喫煙及び飲食はご遠慮ください。
- 園内でのごみ捨てはご遠慮ください。
- 園路以外には、入らないでください。
- 生物・植物などをとったり傷つけたりしないでください。
- 犬・猫などのペットを連れての入園はできません。（盲導犬、介助犬などを除きます。）
- 鯉に餌をやらないでください。
- 他のお客様の迷惑になるような行為はご遠慮ください。
- 足元のご不自由な方は、案内所に申し出てください。
- 呼び出し放送などは、行っておりませんのでご注意ください。

■お問い合わせ／

徳川園管理事務所
〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001
TEL：052-935-8988　FAX：052-937-3847
［ホームページ］http://www.tokugawaen.city.nagoya.jp

題字：徳興山建中寺第三十五世住職　村上賢瑞

徳川園



❸ 龍仙湖（りゅうせんこ）

海に見立てた水面の周りに見どころを配する池泉回遊式庭園の中心的存在で、地下水を水源としています。黒松を背にして浮かぶ島々、巨石に懸かるもみじ、水際を渡る飛石、突き出す砂嘴、舟小屋のある渡し場などを巡りながら楽しむことができます。

❹ 西湖堤（せいこてい）

白楽天、蘇東坡など、古くから文化人の憧れの景勝地である中国杭州の西湖の湖面を直線的に分ける堤防を縮景したもので、異国情緒を日本庭園の中に取り入れています。東京都の小石川後楽園、広島県の縮景園など、現存する大名庭園にも見られる様式です。

❺ 瑞龍亭（ずいりゅうてい）

光友の諡號「瑞龍院」から名づけられた小さな茶室で、龍仙湖の彼方に西湖堤を眺望することができます。織田有楽斎を始祖とし、かつては尾張徳川家で重用された尾州有楽流に因み、有楽好みの様式を取り入れています。

❻ 虎の尾（とらのお）

深山幽谷の山水画を思わせるような渓谷美を表現しており、初夏には新緑、秋には紅葉が美しく彩ります。椎の樹林から流れ出した水が、もみじの木々を縫って龍仙湖へと注ぐ形状は虎の尾のようで、「虎の尾を踏んではいけない」ことから「川に足を踏み入れてはいけない」ことを連想させます。

❼ 虎仙橋（こせんきょう）

虎の尾に架かる檜造りの木橋で、5m下に渓流を見下ろし、下流に龍仙湖を望みます。

❽ 大曽根の瀧（おおぞねのたき）

虎の尾を上りきると到達する落差6mの三段の滝です。上、中、下段の岩の組み方が異なるため、それぞれ水しぶきの表情には変化があります。滝の背後の山は徳川園の中で最も高く、龍仙湖水面との標高差は約11mあります。「大曽根」は、古くからこの辺りの地名でした。

❾ 四睡庵（しすいあん）

梅や桃の木に囲まれた休み処で、隠れ里のような風景の中にぽつりと立っています。四睡とは、禅の境地を示す画題の一つで、豊干、寒山、拾得の三人が虎と寄り合って眠っている情景をあらわします。

❿ 観仙楼（かんせんろう）

龍仙湖に面する二層の建物で、眺望が抜群です。レストラン、ホール、ショップとしてご利用できます。

牡丹

春には徳川園一帯で約1,000株もの牡丹が豪華に咲き誇ります。見頃は4月の中、下旬です。

花菖蒲

江戸時代に改良されて今も親しまれる江戸系などを中心に約1,700株の花菖蒲を楽しむことができます。見頃は5月下旬から6月初旬です。